

とお みかど だざいふ

「遠の朝廷・大宰府」

おおきみ をすくに

やすみしし わが大君の 食国は

やまと ここ

倭も此処も 同じとぞ思ふ

巻六―九五六 作者 大宰帥 大伴旅人

(解説) 私がお仕えする大君が、安らかにお治めになる国は、中央の大和もここ大宰府も同じ、異なることはないと思っている。

この歌は神龜四年(七二七)末か翌年春頃、大宰帥(大宰府の長官)として赴任したばかりの大伴旅人に向い、少弐(大宰府の長官を補佐する次官)石川足人が

「さす竹の大宮人の家と住む 佐保の山をば思ふやも君」

(巻六―九五五)

(大宮人が家として住んでいる平城ならの佐保の山を、あなたはなつかしく思いになるでしょうか)

と大伴旅人の望郷の情を思い問いかけたのに対して、旅人が和えた歌である。ここでは旅人は、遠の朝廷大宰府の長官としての気概を詠っている。

●「遠の朝廷」については柿本人麻呂が筑紫へ下った時に万葉集巻三―三〇四で大宰府を「遠の朝廷」と呼称する歌を創っている。

「大君の遠の朝廷とあり通ふ島門をみれば神代し思ほゆ」

(わが大君の治められる遠く離れたお役所(大宰府をさす。)とし

て、人々がいつも往き来する島門を眺めていると、この島々が生み成された神代のごが偲ばれる。」

●「食国」は天皇のお治めになる国。

●佐保山は奈良・平城宮の東側に位置し裾野は佐保と呼ばれ奈良時代は高級貴族の邸宅、別荘地で、大宰帥・大伴旅人、大伴家持を輩出した大伴氏の邸宅があったといわれている。

●大宰府は「オオミコトモチノツカサ」とも読まれる、古代律令制下、地方における最大の役所であり、九国三島（九州と壱岐・対馬・種子島）を統治し、外交・貿易の窓口であり、かつ辺境防備を担った。

その起源については必ずしも明確ではないが、発掘の成果や文献史料から推測すると、天智天皇三年（六六三）の朝鮮半島西南端の錦江河口における白村江（「はくそんこう」ともよむ。）の戦いで百濟日本連合軍は唐新羅軍に大敗し、半島から完全に手を引いた。同四年（六六四）、唐新羅の侵略を恐れて防人・烽を設置し、筑紫に水城を造った。さらに同五年（六六五）に大野、基肄城などの山城を築き国土防衛を固めた頃、それまで那津（博多湾岸）にあった筑紫大宰とその組織が、防衛線に衛られた内陸の現在地にうつされ、大宰府として成立したものと考えられている。

日本書紀には白村江の敗戦の翌天智天皇四年（六六四）次のように記す。

「対馬嶋、壱岐嶋、筑紫国等ニ防人ト烽ヲ置キ筑紫ニ大堤ヲ築キ、水ヲ貯エシム。名ヅケテ水城トイウ」。大宰府の登場である。

●大宰府政庁は「都府楼」ともよばれている。これは都督府（大宰府の中国・唐名）の楼閣（重層）という意味で、菅原道真が大宰府で詠んだ「都府楼はわずかに瓦の色を見る」という漢詩「不出門（もんをいはず）」の一説に由来しているといわれている。

(写生地)

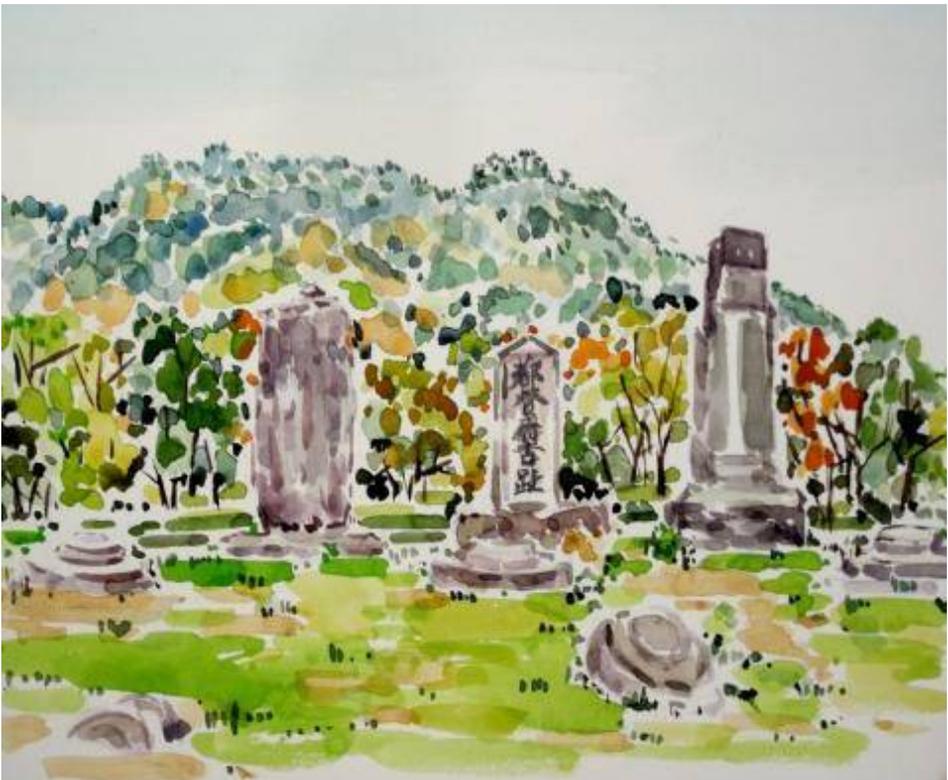
大宰府政庁は奈良時代から平安時代にかけて壮麗な建物が立ち並んでいたことが発掘の成果等でわかってきている。

往時を偲ばせる草むらのなかの大きな礎石と大宰府政庁跡のシンボルともいえる「都督府古址」と刻まれた顕彰碑など3基の石碑と背後(北)に山城が築かれた大野山(いまの四王寺山)の山並みを描く。

(池田杏花)

大宰府政庁(都府楼)址(福岡県太宰府市坂本三―十五都府楼跡)

「西鉄都府楼前駅」徒歩十五分



●大伴旅人はこの歌（巻六―九五六）と同時期に大和への郷愁から次の歌（巻三―三三二）を作っている。この二首（三）・三二六、（三）・三三二の歌からは官人としての立場と旅人本人の心情を詠った複雑な気持ちがあくみとれる。

きよ

「象きよの小川きよ（大和・吉野）」

昔見しきよ 象きよの小川きよを 今見れば

きよ

いよよ清きよけく なりにけるかも

卷三―三二六 作者 大伴旅人

（解説）

昔見た象（きよ）の小川を今ふたたび見ると、流れは昔にましてもよいよますます清らかである。

○この歌の歌題は「暮春の月に、吉野の離宮（とつみや）に幸（いでま）す時に、中納言大伴卿、勅（みことのり）を奉（うけたまは）りて作る歌一首 併せて短歌いまだ奏上を経ぬ歌」となっている。

○吉野の離宮は聖武天皇が奈良時代に吉野宮の西側に造営した。

○この歌は作者が聖武天皇の吉野行幸に際して作った歌である。通説

では、聖武天皇が即位した神亀元年（724）の作。実際には天皇の前で奏上（そうじょう）する機会はなく、未発表のまま、作者、大伴旅人の手元にあった歌である。大伴旅人はこの歌を作った三年後に大宰府に赴任している。

我が命も 常にあらぬか 昔見し
象の小川を 行きて見むため

卷三―三三二 作者 大伴旅人

（解説）

私の命はいつまでもあつて欲しい。昔見た吉野の象の小川にもう一度いってみるためにと思いをはせる。

●大伴旅人は先の歌から三年後の神亀四年末から翌年春にかけて大宰府の帥（長官）として赴任した時に大和への郷愁と昔、遊んだ象の小川に限りない愛着を寄せ回想した歌といわれている。

○万葉時代に呼ばれた「象の小川」は今の喜佐谷川（奈良県吉野郡）である。名の由来は象の小川がギザギザに曲折して流れることから付けられたと伝えられている。

○喜佐谷川（象の小川）は吉野山中に発し昼なお暗い深山幽谷を走り下る。この流れに沿ってのびる細い山道が、吉野の宮滝に通じる古代

の道である。吉野杉の美林と喜佐谷川源流の清らかな流れは、そのまま万葉時代を今に伝えてくれているようである。

(写生地)

吉野の宮滝から象の小川(喜佐谷川)を辿りながら谷を埋め尽くすばかりの杉と桧の美林を抜けると民家もまばらな喜佐谷の集落が見えてくる。この辺りの象の小川は昔のまま清らかに流れていた。喜佐谷の集落の中を流れる象の小川(現・喜佐谷川)を描く。

(池田杏花)

(奈良県吉野郡喜佐谷村を流れる象の小川)

